

教員氏名：星野 真由美（児童教育専攻／教授）

1. 教育の責任（何をやっているか）

児童教育専攻に所属し、主に、教員免許と保育士資格の両方で重要になる子ども理解や教育相談、心身の発達などに関わる心理学系の授業、そのほか認定心理士の資格取得に必要なとなる心理学の授業を担当している。また、学生指導の基盤に位置付けられている1年、2年の「ゼミ」の担任と卒業研究に向けた3年、4年の「ゼミ」の担任を持っている。また、日本大学大学院附属の心理臨床センターでは非常勤として相談業務のほかに大学院生の教育や若手の臨床心理士・公認心理師への教育指導にも関わっている。また、育英短期大学で兼任として保育者養成に関わる授業を担当した経験や保育士、幼稚園教諭のリカレント教育や研修会講師の経験がある。

現在の主な担当科目一覧	
必修科目	教育心理学、教育相談、卒論、ゼミなど
選択科目	臨床心理学、発達臨床心理学、カウンセリング論 心理療法概論、心理検査法

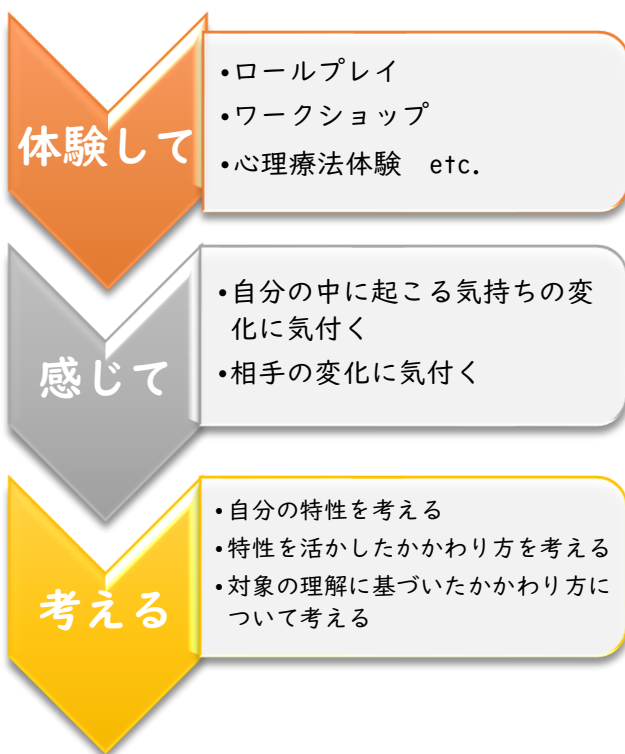
2. 教育の理念（なぜやっているか）

専門分野を研究するものとしての理念やその背景や経験

私は、臨床心理学、教育心理学を専攻しているが、特に遊びを媒介とした子どもの心理療法（プレイセラピー）や親子の相互交流にアプローチする心理療法を中心に共同研究や個人での研究にかかわってきた。こうした研究の背景から、教員や保育者がカウンセリング・マインドをもって子ども理解を深めることや、子どもとの関係性の質をとらえることについても考えるようになった。今は子どものストレス反応への教員や保育者による心理支援についてや、子どもとの関係性を深める遊びの体験や映像を用いた保育者研修などが研究テーマのひとつとなっている。

学生の学習に対する理念

学生自らが、「体験して」、「感じて」、「考える」の学習の姿勢を大切にしています。教職や保育者養成に関わる心理学系の科目では、知識を知ることだけではなく、実際の子どもや保護者との関わりにそれらの知識を活かしていくことが重要である。そのため、具体例を使ったり、映像を利用したり、実際に体験しつつ理解することを重視した授業を展開している。また、ロールプレイやディスカッション等を通して、自己理解を深めることも重視している。



3. 教育の方法（どのようにやっているか）

具体的な教育上の実践や教材の工夫

心理学領域の学習をすすめるにあたって、以下の工夫をしている。

① 「カウンセリング論」「心理療法概論」などでは、ロールプレイや体験型の学習を実施している。子ども役や教員役、カウンセラー役などを通して、他者の気持ちを想像していくこと、相談の場では何が起きているのかを理解していくとともに、自己理解にもつなげていく。また、箱庭療法やコラージュ療法などの体験を行うことで、非言語表現を理解する機会を取り入れている。

- ② その他にもワークショップ型、双方向型の授業形態、アクティブラーニングを取り入れて、体験しつつ主体的に考えていく姿勢を重視している。
- ③ 教材の工夫としては、受動的に聞くだけの授業とならないように、配布資料は書き込みができるように作成し、書き込み内容をもとにまとめや振り返りができるようにしている。Google Classroom の活用をし、理解に至った経緯などが振り返れるように感想の共有や資料提供を行っている。
- ④ また、ビデオ教材を使用して、言語的なやりとりだけでなく、表現された活動や遊び、表情や姿勢、その場の環境条件などを映像からも確認し、多角的多層的に子どもを理解する視点がもてるように工夫している。

学生との関係構築のための工夫や配慮

ロールプレイや心理療法などの体験を授業内で実施していくため、学生が安心して授業にのぞめるように配慮している。授業のオリエンテーションでは受容の姿勢や個人情報を守ること等の大切さを伝え、さらに各体験でペアを組む場合には相手と自己紹介をしたり感想を共有する時間を取っている。私は体験の場が安心できる環境となるよう配慮しつつ、学生の近くに行って様子を見守ったり、必要であれば声をかけたりしている。ここでは特に感想や質問を受けることが多く、個別に応答したり、質問内容を共有できるものは全体にフィードバックしている。

授業では学生に授業の感想を書いてもらっている。それに対して次の授業で感想を紹介したり教員のコメントを入れた資料にして学生に配布したりしている。他の学生の学びを知る機会とし、また復習と次の学びへの導入にしている。

4. 教育の成果（行った結果どうだったか）

学生の学習成果

学習成果をあげる学生と、難しい学生との2極化がみられる。

心理学に関する授業の主な履修者は、①興味があり心理学系科目を多く履修している学生、②教職必修科目のみ履修している学生、③心理学に興味はないが単位数のために選択科目を履修している学生があり、特に選択科目では①と③の学生の学習成果には差がみられる。

私の担当授業だけでも、必修2科目のみを履修する学生と、選択を含めた7科目を履修する学生があり、共有している知見に差がでることが特徴のひとつである。また、選択科目を履修している学生でも、認定心理士などを取得するために興味をもって履修している学生と単位数のために履修している学生ではモチベーションに大きな差がある。さらに児童教育専攻、スポーツ教育専攻の両学生がいることや、多学年の履修者がいること、教員免許を希望しない学生が多く履修していることも特徴である。

皆がモチベーションをもって取り組める学習内容にしていけるよう今後も授業づくりを進めたい。

学生による授業への評価

「授業改善のためのアンケート」結果によると、おおむね良好な回答を得ている。特に、授業の方法については評価が高い傾向にある。しかし、事前事後学習を含めた学生自身の取り組みの自己評価は他の項目に比べると低い傾向があるため、意欲的に取り組むための工夫がさらに必要であると考えている。

また、学生による「授業改善のためのアンケート」結果により、学生による授業評価の良好な授業（「教育心理学」「カウンセリング論」）に選ばれている。

5. 教育における今後の目標（これからどうするのか）

先にも述べたように様々なモチベーションの学生が授業を履修しているが、学生と教員、また学生同士で相互交流しながら授業を展開していきたい。今後とも、学生たちが自分で考える機会をもつ授業となるよう工夫をしていきたい。

【添付資料】 ※全部又は一部の現物を省略しています。

1 シラバス

2 F Dの成果（授業評価アンケートの結果）